

知った思いで嬉しく存じたことでした。

まだまだ本学の為、ご助力を願わねばならぬ矢先きの訃報に断腸の思いで一杯です。今後先生の分まで力をつくし努力する所存です。どうか先生の御霊の安らかに眠られんことを祈ります。

昭和五十九年五月十三日

## 弔 辞

駒沢大学文学部歴史学科

主任 葉 貫 磨 哉

大野達之助先生 長い間駒沢大学歴史学科の教室の発展のために御尽力を頂き本当に有難とう御座居ました。

思い出せば確か先生は、昭和三十三年の四月より、文学部教授として教鞭をとられ、今日まで二十六年の教壇生活を過されました。この間には多くの学生を導かれ、また教室の運営と和やかな研究生活の出来る雰囲気作りに精進されました。

特に昭和三十九年四月より佐藤堅司先生の跡を嗣いで学科の責任を負われ、四十年代の学園紛争のさ中はこれらの重責を負って奔走されました。これら多忙な時期に他所の学生研究会の指導をも兼ねたり、微笑会の顧問をなさったり積極的に教室の便宜を計り、学生の相談に応じたりして下さった事は先生の優しい思いやりの片鱗をかい間見た気が致します。また学生の見学旅行にも時折引率され御自分が満足されるまで説明されたり、正規の授業は一時間たりとも休むことなく、先生の授業に休

講と云う言葉はついぞ聞く事がありませんでした。超然として高い理想を保つ孤高の人でした。教壇に立つ事を無上の喜びとし、誇りとして居られたからだと思えます。

これらの講義のあい間を見ては研究に精を出され、『日蓮』・『日本の仏教』・『上代の浄土教』・『新稿日本仏教思想史』などの著作をものにされ、近くは『鎌倉新仏教成立論』を著わされました。私が四月二十日二十一日の両日先生に御見舞かたがた報告に伺った折に、先生は四月中入院し、五月初めには退院出来、六月には出勤出来るから安心するように、とおっしゃいました。教壇に立つ事が待遠しい様子にお見受け致しました。

然し不幸にして再び研究室にまたは教壇に先生のお姿を見る事が出来なくなりました。本当に残念でなりません。これから少しでも先生を見習いつゝ頑張って行きたいと思えます。それでは先生安らかにお眠り下さい。

昭和五十九年五月十三日